

地域で分業に取り組む

飲み忘れ防止の工夫を患者から収集、 服薬指導に活かす

岐阜市 しいのみセンター薬局

院外処方せん発行率が5割を超えるようになり、医薬分業が定着してきた感がある。これまで受け皿の整備に忙しかった薬局だが、医薬品の適正使用を目指して、服薬指導の充実を図り、薬局機能を高めることに力を入れる薬局が増えてきている。

岐阜市にある、しいのみセンター薬局もそんな薬局の一つだ。薬局長の朝倉恵美子氏は「薬局は、患者さんの日常に近い場所にいる。サポートできることがたくさんある」と話す。

しいのみセンター薬局は、2002年4月に開局して以来、1日220枚程度の処方せんと、50人程度の在宅患者を抱える薬局だ。同薬局では2003年に、患者を対象にした「薬の飲み忘れを防ぐための工夫」についてのアンケートをとり、服薬指導に活かしている。

アンケートをとったきっかけを、薬局長の朝倉氏は「患者さんの多くは、非常に熱心に薬物治療に取り組んでおられます。どうして、これ程、きっちりとお薬が飲めるのか、それが不思議で始めたのです」と話す。患者のコンプライアンス不良に頭を痛める薬剤師は多いが、朝倉氏はむしろ逆のことを感じたという。

◆服用薬を分けて管理する

アンケートは約200件回収でき、そのうちの132件の回答に、自らのコンプライアンスを高めるための工夫が書かれていた。具体的には、「お弁当箱に入れておく」「胸のポケットにクリップでぶら下げておく」「プリンケースを朝昼晩と別につくっておき、そ



しいのみセンター薬局。様々な患者の声をヒントに、充実した服薬指導を目指している。

こに寝る前に入れておき、飲んだあとは、PTPのカラーを入れるようにする」「ユニパック(ビニールの袋、チャックつき)に自分でカラーリングしてわかるようにする」「飲んだことをカレンダーにつけていく」など、実に様々な工夫が寄せられた。



朝倉恵美子氏

「長い療養生活の中から生まれた知恵が凝縮されていました」と感心する朝倉氏。「服薬が生活の一部となっており、患者さんそれぞれに“お薬文化”とも呼べるものがあると感じました」と話す。

これらの結果から同薬局では、服薬状況の悪い患者に対して、①1回に服用する薬を区分し、保管できるピルケースを用意すること、②服用の有無が明瞭カンタンにわかるようにすること、③薬を常に目に付きやすい、身の回りに置くこと——の3項目を指導するようにしているという。

「とにかく、薬袋から出して、それぞれの生活空間の中で目につきやすいところにおくことが大切です。服薬状況が改善されず、例えば1日3回服用の薬を1日1回の薬に変更してもらうように医師に服薬情報提供書を出すことが少なくなった気がします。また全体的に残薬も減ってきているようです」と、その成果を話す。

アンケートには数名の患者から、「薬の必要性を理解することが大切」というコメントが寄せられた。

「具体的な工夫も大切だけれど、それ以前に医師の治療方針や薬に対する信頼がなければ薬物療法はうまくいかないということを改めて教えられた」。服薬する意義が十分理解でき、納得できる服薬指導をするよう、スタッフ全員で取り組んでいるという。

◆患者は「欲しい薬がたくさんある」

同薬局は、病院の門前ながら、OTC薬、治療食、介護用品などの販売にも力を入れている。「当初は、通院している患者さんにはOTC薬は必要ないのではないかと感じていましたが、要望があったものを取り扱ううちに、どんどん増えてきました」。薬局製剤も13種類作っており、これが「それなりに売れる」そうだ。

そんな状況を見て朝倉氏は、「薬剤師は余分な薬を削るということに熱心だが、本当はもっと患者さんの薬に対する思いを汲んで差し上げるべきではないか」と話す。医師に提案して処方薬を削除し、苦言をいただいたこともある。患者は「欲しい薬がいっぱいある」というのだ。

というのも、医師は主疾患を治すことを中心に考えるため、細かい症状の訴えは「大丈夫」の一言ですませがちだからだ。しかし患者にとっては、自覚症状のない高血圧より、自覚症状がある、かゆみや便秘などのほうが気になる場合もある。

「誰に相談することもできず、ここで話す患者さんが多くいます。『医師に問い合わせてみましょうか』と聞くと、遠慮される。患者さんが納得いくように相談に乗るのも、薬局の仕事だと考えています」。

同薬局では、服薬指導時に隣の患者が見えないように、投薬カウンターに仕切りを設けている。「声は多少、聞こえますが、隣同士で顔が見えないことで、いろんな話がしやすいようです」。またスタッフは



患者ニーズに応えるため、医薬品以外の治療食なども充実させている。

「今日はいかがですか」という一言を忘れないようにしている。その一言がきっかけとなって、いろんなことを訴えてくる患者が

多いからだ。

朝倉氏は、患者の薬物治療上の問題や疾病に関する話だけでなく、前述のような薬を飲み



患者が話をしやすいように、投薬カウンターには仕切りを設け、患者プライバシーに配慮している。

忘れないための工夫や、食事の仕方や生活習慣など患者なりの療養上の工夫など、患者が実践している療養上の注意にも積極的に耳を傾ける。そして同じ悩みをかかえる別の患者に、工夫や方法を紹介するのだという。「同じ病気の人への体験は説得力があります。経験を共有させることで、悩んでいる患者さんの助けにもなります」。このため、同薬局の服薬指導は総じて長い。

◆薬剤師にも専門性を

現在、同薬局では、6年制も視野に入れ、独自の専門薬剤師制度を取り入れようとしている。独自の認定単位を作成し、取得することで、専門薬剤師として薬局が認定するものだ。現在、褥瘡、栄養指導、高血圧、腎臓、小児アレルギー、糖尿病、漢方などが考えられている。

認定単位は、専門にかかわる学会への参加、学会発表、薬局内での勉強会、原稿執筆、健康講話などへの参加などによって取得することができる。さらに、隣接する病院の専門外来の診察を見学する臨床研修等も必須単位となっている。

「それぞれの薬剤師が自分の専門を持ち、その分野について薬局の中で責任を持つことで、薬剤師としてのスキルアップにつながるはず」と朝倉氏。認定を取得することで、仕事へのモチベーションも高まるという。

「薬剤師は、患者さんの服薬状況や副作用、相互作用のチェックだけでなく、薬物治療の効果はあがっているか、処方されている薬が病状に合っているかということもチェックしていくべきです。そのためには専門性を持ち、その疾病に対する深い知識を得ることが必要とされます」と朝倉氏は話している。